

インターンシップの参加時期は？ 試験対策はいつから？

就職内定者に聞く

年が明ければ3年次生の就職活動が本格化する。インターンシップの制度変更など、1、2年次生にとっても気になる話題が多い。いつ、何をすればいいか。内定を得た4年次生2人に体験を語ってもらった。



杉山 裕紀さん

法学部政治学科4年次
内定：電子部品メーカー

日本の経済をけん引する自動車業界に興味がありました。中でも自動車関連の電子部品メーカーは、3年次の冬にインターンシップに参加し、時代に対応して革新を遂げる姿を目の当たりにして、改めてこの業界に進みたいと思いました。

所属していた学生ボランティア団体・SKVの先輩からの助言もあり、キャリア形成支援課の支援プログラムを積極的に受けました。準備段階では、課題解決型インターンシップ(現・問題解決型チャレンジプログラム)への参加、自分を知るために「自己理解ワークショップ(心理検査MBTI)」を受けました。就活が本格化してからは、講座のほか、模擬面接やエントリーシ

ート(ES)の添削を頻繁にお願いしました。模擬面接のおかげで本番でも自然体で話せるようになりました。ESは自己分析のほか企業研究も必須ですが、最初はやり方が分からず戸惑いました。キャリア形成支援課で「中期経営計画など投資家向けの情報も見たら」とアドバイスを受け、参考にしました。

内定先は海外の売上げが8割超のグローバル企業で、世界情勢が経営に影響します。世界の政治情勢など、ゼミや授業で学んできたことを生かしていきたいです。

1、2年次はコロナ禍でもあり、ふさぎ込むこともありましたが、SNSで目にした就活の話題に不安になったことも。簡単に情報に触れる時代だからこそ、信頼できるメディアを見つけ、自分にとって必要なものを見極める目を育てることが必要だと感じます。就活は自分と向き合う貴重な時間。うまくいかなくても自分がダメだと思わないで。これからの人生にとって必要な時間として向き合うことが大事です。

2年次	3年次	4年次
5-12月 課題解決型インターンシップに参加	6月 筆記試験対策	1-2月 自己分析、業界研究、早期選考
		3月 ES提出面接
		5月 会社説明会、ES提出面接
		5月 内々定



魏 東俊さん

商学部マーケティング学科4年次
内定：インターナショナルコンサルティングファーム

2年次の11月にゼミの先輩による就活セミナーに参加。同時期に別の先輩に自己分析を手伝ってもらい、将来どうしたいかが見えてきました。ルーツのある韓国と日本をビジネスでつなぎたい、そのためにグローバル企業で働きたいと決めました。

第1志望の総合コンサルティング業界は選考時期が早く、面接ではロジカルシンキングが求められます。普段からロジカルシンキングを意識し、学業の合間に対策を進め、3年次の11月には内々定を得ました。就職活動は継続し、インターンシップや他業種の選考を進めました。新たに始めた長期インターンシップは社会人ゼロ年目として臨みました。

早期選考での内々定獲得は、心理的な安心材料になると同時に、本当に自分がやりたい仕事は何か、時間をかけて探すことができます。

就活では自分から動いていくことが大事です。私は先輩方のアドバイスのほか、インターンシップ先の他大学生や、SNSでつながった同じ志望先の人と情報交換するなどしてきました。そこで意見を交わすことで「自分はこうなりたい」というヒントを見つけることができました。就活は一人ではなく、周囲の人と進めることが重要だと思います。

壁にぶつかって自信を失う場面はたくさんありますが、そういう時こそ、これまでの努力や成功体験が生きてきます。選考の通過基準は、まずはESとWEBテスト(筆記試験)。先に進むためには最大限の努力でこれらを突破することが求められますし、それは自信につながります。まずは迷っていないで行動に移すこと。これが第一歩ではないでしょうか。

2年次	3年次	4年次
11月 先輩主催の就活セミナーに参加	2月 長期インターンシップ	4月 ES提出、WEBテスト面接対策
	8-9月 夏インターンシップ	11月 コンサル企業内々定
		1月 冬インターンシップ
		6月 別業種の選考、内々定

就活 Word

エントリーシート (ES)

学生が企業に応募する際に提出する応募書類のこと。自社の求める人材像に合致した学生かどうかを知るために「その企業独自の設問」で構成されているのが最大の特徴。志望動機や自己PR、学生時代に力を入れたこと等について問われる。インターンシップへの参加もエントリーシートの提出を求める企業が多い。杉山さんのエントリー数は「30~40社」、魏さんのエントリー数は「インターンが60社、本選考が35社」。

キャリア形成支援プログラム

自己理解・社会理解・能力開発の3要素をテーマに年間100以上のプログラムを実施。講義やワーク、実践を通じて、学生が自分らしいキャリア形成をしていくために低年次から段階的に支援している。

インターンシップ

企業の業務理解を深めるために学生が在学中に企業などで就業体験をすること。2025年卒の大学生・大学院生から制度が変更になった。これまでは1日程度のものから長期のものも含めてインターンシップと総称していたが、現制度では4分類され、半日程度の情報提供は「オープン・カンパニー」とする。一方、就業体験必須のインターンシップは企業の採用選考に利用できるようになる。今回紹介した2人が参加したのは変更前の制度のもの。

筆記試験

選考の一つ。「適性検査」と呼ばれており、一般的には国語が出題される言語分野、数学系の問題が出題される非言語分野、性格適性検査を行う。

就職だより

〈3年次生〉就職活動では、自身を客観視して等身大の自分で臨むことが重要となります。進捗状況を確認するためにも就職支援システム「Sinet」に展開している「アーカイブ動画(就職ガイダンスや準備講座等)」を参考に、年末年始休暇期間を有効活用して準備を進めてください。また、些細なことでも分からないことなどはそのままにせず、キャリア形成支援課に相談してください。〈4年次生〉4年次生は、進路決定者は「進路届」を就職支援システム「Sinet」もしくはキャリア形成支援課窓口にて、必ず提出してください。

多彩なテーマで議論したパネルディスカッション



政策科学シンポジウム 中小企業の課題を議論

大学院経済学研究科と社会科学研究所が主催する政策科学シンポジウム「地域産業と中小企業」が10月30日、対面とオンラインのハイブリッド方式で開かれた。外部の専門家2氏と経済学研究科の教員が、日本の中小企業の成り立ち、将来に向けた多角的な経営方法や政策課題について議論を交わした。日本各地域産業や地域活性化を研究してきた一橋大学名誉教授の関満博氏が基調講演を行った。歴史的経緯について解説し、「現在はビジョン先行になっているが大切なのは人。行政の担当者に10年は仕事を継続し、地域や企業のことを理解した上で支援を行ってほしい」と話した。パネルディスカッションで、遠山浩教授がコーディネーターを務め、関氏、神戸大学大学院経営学研究科教授の忽那憲治氏、本学の長尾謙吉教授、河藤佳彦教授が登壇した。アントレプレナーシップ(起業家精神)教育、産業集積地が抱える課題、地域産業の発展可能性などをテーマに、意見を交わした。

知の発信

科研費採択研究から



経済学部准教授 森 啓明

2023年のノーベル経済学賞には、労働経済学者のゴールディン氏が選ばれ、この分野への注目が高まっています。労働経済学は、人々の働き方に関するさまざまな問題を扱う学問分野です。多くの人は働き始める前に教育を受けるため、労働経済学では教育に関する研究も盛んに行われています。

私に関わった過去の研究では、誕生月の違いが学力だけでなく最終学歴にも影響を与えることが明らかになりました。今回の研究では、いじめ被害や非認知能力形成への影響を解明していきます。実証分析の結果から、学年内で相対的に月齢が低い1、3月生まれ(早生まれ)は、学校でいじめ被害を経験する割合が4、6月生まれに比べて約4%高いことが分かりました。4

データで読み解く月齢差といじめ被害の関係

6月生まれのいじめ被害経験割合が約20%であることを踏まえると、これは大きな差です。また、成人の対人能力に関しても偏差値換算で1割の差が見られ、誕生月に基づく能力格差は成人後まで続くことが明らかになりました。日本では、児童の就学開始時期は学校教育法によって一律に定められており、原則として例外は認められません。一方、他国では、保護者の判断で小学校の入学時期を遅らせることができます。日本の画一的な制度の下では、児童間の相対的な月齢差は義務教育段階を通じて変化しないため、いじめ被害の偏在や能力形成に関する機会格差が生じやすいと考えられます。早生まれは不利だと言われることがありますが、誕生月に基づく能力格差は、家庭環境や個人の先天的な能力の差を反映するものではありません。それは制度的に生み出された差であり、是正されるべきものです。この研究を通じて、画一的な教育制度が生み出す教育格差の存在に対する理解と議論が深まることを期待しています。研究成果の一部を、23年7月に国内の学会で報告しました。今後は国際的な発表に向けて、さらに研究を進めていきます。(もり・ひろあき)ウェスタンオンタリオ大学 経済学部博士課程修士 Ph.D. in Economics. 研究分野は労働経済学、教育経済学。

若手研究(2023、26年) 月齢差が子どもの発達といじめ被害に及ぼす影響の評価